

目黒稽古場だより

2025/10月

No.42

目黒稽古場 菊地実

090 (4755) 5697
megurokeikojo@sf7.so-net.ne.jp

【九月稽古まとめ】

〈晴風〉

月間「全生」九月号に野口裕介先生の文章が載っている。その中の「見入る集注」の抜粋です。

が、直接その人が見えてくるんじゃないだろうか。
……中略……
私はこの光景を見て、あ、これが必要に愉氣なんだなあと思った。」

「私は茶杓なんかと、ばかにしていたけれども、あれだけ丁寧に見たら、茶杓を作った人に直接会っているような気分になるだろうなと思いました。例えば、利休という人に直接会っていたとしたら、その茶杓から利休という人を感じることが出来ないかもしれない。しかし、利休の作った茶杓を、そこまで集注して見ていったら、利休という人に非常に近く会うことが出来るのではないだろうか。却って生きている人間の、余分なゴチャゴチャしたものを見ないで、茶杓だけ見ている方

この文章を読んで、ある技術研究員の言葉を思い出した。

「僕は、ダン先生が大切に育ててきたご子息の方の稽古に出ることで、ダン先生に出会えたような気がする。ダン先生の後姿が見えてくるような気がする。」

もしそうであるならば、ダン先生の稽古に出ることで、晴哉先生に出会えるのではないだろうか。では、晴哉先生に会うことで、何に出会えたのだろうか。そこに連綿と続く、太古からの風を感じてきたのではないだろうか。そんなことを思ってしまった。

●茶動法

大阪の奥須賀さんに教えてもらった稽古を参考にした。

「全力で道具に触るけど、その道具は決して拘束しない。」

そのことを可能にするのが手首のきめ方である。

手首の外踝と内踝を水平にすると、手首から先の掌や指に力が入らないような気がする。

この手首の水平を保ちながら道具に触れる。

触れたら、全力でつかむ。腹の底から全力でつかむけど、手首から先には伝わらない。

全力でつかんだ道具だが、相棒が手から道具を抜けば、スッと抜ける。

この要領で、帯を握る。その帯で畳をはく。雑巾も手首が水平になるようにして拭く。

そうして作った場合は、釜をどこに置くのが決まる。

いざ皆が場に着座すれば、誰が亭主か、誰が客か分かる。場が決めてくれる。

●定例

今回は基本的な稽古。「流れ」自分が動く前に、体に起こっている「流れ」をまず捉えてから、その流れが止まらないように、聞えないように体を動かして行く。途中で聞えたら、そこを抜く。上手く抜けば新たな流れが発生してくる。

・座法で座る。
座る前に流れを捉えて、その流れで座法で座る。

・胡坐から立ち上がる。
体を起こっている流れで立ち上がる。

・人込みの中を歩く。など。
このことが分かれば、次は氣の流れ。氣の流れが聞えるところを上手く抜けば、氣の流れも盛り上がってくる。

●茶観（慈縁庵）

「暑さ寒さも彼岸まで」と言うが、猛暑だったのに急に秋らしくなった秋分の日。今回の慈縁庵での茶観は、松本さんにお願いで、「炭手前」を行って頂きました。

松本さんには、道具や炭をお持ち頂き、灰を盛る下準備からお手前まで、全て任せっきりで大変だったと思います。改めてお礼申し上げます。

しかしながら、そんな大変な準備を淡々とこなしていく姿を見て、本当にお茶が身についているんだなと思いました。客には大変さを見せない、悟られない。なんか野口先生（晴風）と同じだなと思った。

稽古としては、大きなテーマとして、如何に身体を出すか。

「我々現代人は、身体を操作するのではなく、身体という観念を操作するようになってきた。触れるものすべて精神の形。どうすれ

ば身体に触れることができるのか。それが稽古場の大きなテーマです。」とダン先生は言われる。今回は「間に入る」ということから身体を引き出す稽古を行った。

〈座取り〉

一、目を閉じて、身体を引きだす。
二、引き出された身体から場を観ると場の残像が観える。

三、その場の残像が体に吸い込まれて行く処がある。

引き込んだらゆっくり目を開けて、場を見れば、自分が座るべき座が、迷いもなく分かる。そこに精確に座れば身体が引き出されている。

その座は静かで何も起こらないような感じだが、亭主が差し出す茶が、自分のものか否かが分かる。つまり、どこに座ろうとかか、このお茶は私のものだろうかという迷いが無い。体を観ていれば自ずから分かる。

